

日本における蘇東坡受容の揺籃期（下）

吉 井 和 夫

前稿（『西山学苑研究紀要』第十五号）では、日本における蘇東坡の本格的な受容の始まりを、延応二年（一二四〇）に深草の興聖寺での上堂の際に説かれた道元の「溪声山色」の條（『正法眼蔵』所収）と見定め、それまでの時期を揺籃期と位置づけて、ことにその前半期である十二世紀中葉から末頃まで、言い換えれば平安時代の末から鎌倉時代の初めまでの受容について見てきた。本稿はそれを承けて鎌倉時代の初期から中期にかけての受容状況を見ていくこととする。東坡が没して百年が経とうとするこの時期に至っても、まだその詩文をふまえての本格的受容には程遠いと言わざるを得ない状況が続いている。それどころか社会状況

の混乱にもなつて文化の受容を担ってきた貴族が没落し、それに代わる階層が育っていないという意味では、前代よりも新たな宋代文化を取り入れるのに不利な条件が揃っていたと言うべきかもしれない。ただその中であつて僅かな萌芽が仏教界に見られるのは、道元やその後の五山文学を予感させるものとして見逃すことはできない。

四

この時期に宋に渡り、仏教のみならず広く宋の文化を体得し、多くの文物とともに帰朝してその紹介に努

めた二人の人物をまず取り上げたい。仁安三年（一一六八）と文治三年（一一八七）から建久二年（一一九二）にかけての二度渡宋し、のち我が国における臨濟宗の開祖となった明庵栄西（一一四一～一二一五）と、やや遅れて正治元年（一一九九）から建暦元年（一二一一）まで十二年間の長きにわたって渡宋し、のち泉涌寺を開いた俊苻律師である。この二人が日本の仏教界に遺した足蹟については他書に譲るとして、本稿との関わりで言えば宋代文化の紹介者としての側面を忘れることはできない。たとえば当時の宋の書道界で主流とされていた東坡と黄庭堅（山谷）の書法を身につけ、帰朝後にその普及に努め、優美な王羲之の書一辺倒であった平安時代の書道に一大変革をもたらした一事をもつてしても、その存在の大きさが理解できよう。¹ また榮西について言えば、養生延寿をもたらずものとしての茶を世に広め、あわせて『喫茶養生記』を著したことでも知られているが、茶について言及することの多い東坡の詩文を、たとえ直接名は記さなかったにせよ意識していたであろうことは十

分に考えられる。さらに僧信瑞が著した俊苻についての伝記『泉涌寺不可棄法師伝』には、帰朝にあたって持ち帰った多くの文物の概要が示されているが、その中に律宗や天台についての仏書に交じって、

儒道書籍二百五十六卷

雑書四百六十三卷

法帖御書堂帖等碑文七十六卷

といったものが見られることに注目したい。これらが具体的にどういった書物や法帖、碑文であったのかは、すべて散逸した今となっては知るすべもないが、俊苻が遠く日本まで持ち帰ろうとしたほどのものであるから十二年かけて収集したうちから選りすぐられたものであったことは間違いなく、それらが宋代文化の理解にとってどれだけ多くの実りをもたらし得たかは計り知れない。

次に、東坡受容を見ていくうえで忘れてはならないのは、榮西や俊苻からはやや後の仁治二年（一二四二）に、聖一国師円爾弁円（一二〇二～一二八〇）が六年

間の渡宋修行から持ち帰り、東福寺普門院に納めた書籍である。それらは文和二年（一一三三）に大道一によって五十五函に整理され千字文番号が付されたが、その際に作られた『普門院経論章疏語録儒書等目録』には個々の書名までが明記されており、さらに他の将来目録には稀な外典についての項が設けられていた。⁽²⁾ その中から東坡の著作としては、次のような書を確認することができる。

（露字号）注坡詞 二冊

（露字号）東坡長短句 一冊

（闕字号）歴代地理指掌図 一卷

ここでもやはり『歴代地理指掌図』の書名が見られるが、これが仮託の書であることについてはすでに前稿で述べたので、ここでの説明は控えたい。少し触れておきたいのは、はじめに記された二種の詞集である。⁽³⁾

この「詞」あるいは「填詞」と呼ばれる文学形式は、あらかじめ決められた幾つかの詞牌と呼ばれる楽曲から一つを選び、それに合わせて歌詞を作っていくというもので、定型詩と違って長短さまざまな句形から成っ

ているため「長短句」とも呼ばれ、また詩人の餘技という意味で「詩餘」という別名もある。唐代に始まった詞は五代を経て宋代になると大いに流行し、張先や柳永、あるいは秦觀といった名手が陸續と輩出した。その中であつて東坡は、本来であれば纏綿たる情緒を盛るとされたこの形式に壮大な歴史的テーマを取り入れるなど新生面を開いたため、豪放派の祖と位置づけられ、やがてそれは南宋の辛棄疾に引き継がれることとなる。

この目録には『注坡詞』『東坡長短句』という二種の東坡詞集が見えているが、このうち前者は、おそらく南宋の傅幹が注釈をした『注坡詞』十二巻を指すのであろう。この書は東坡詞の注釈としては最も古いものの一つで、紹興年間（一一三一―一一六二）に杭州で刊行された記録が残されている。⁽⁴⁾ また後者の『東坡長短句』に当たるものとしては、曾慥によって編まれた『東坡先生長短句』二巻を挙げる事ができよう。⁽⁵⁾ この書も紹興二十一年（一一五一）に刊行されたようで、両書ともに円爾がその刊本を持ち帰ることは十分

に可能であった。東坡詞集のうち現存する最古の刊本は元の延祐七年（一三二〇）刊行の『東坡樂府』二卷であるが、おそらく南宋の頃には幾種もの刊本が通行していたと考えられる。

なお、この将来目録に東坡の詩文集が全く見当たらないのに対し、詞集が二種も記載されていることについては、単に新しい文学に対する物珍しさからという以上の何かしらの目的があったのではないかと思わせる。たとえば当時の緇流の間で実作への機運の高まりが見られたのではないかとの憶測がはたらくのであるが、結局のところ五山文学は詩文の分野でこそ夥しい作品を残したが、こと詞については殆んど見るべき成果は認められていない。そうした事実をふまえると、この二種の詞集は、『石門文字禪』や『冷齋夜話』を著した覚範惠洪や、東坡とも親しかった仲殊など詞に堪能な禅宗の大徳が少なからずいることを知った円爾が、日本の禅林でもやがてそうした風潮になることを見越して将来したのではなからうか。十三世紀半ばという、五山文学が芽生えようとする直前の将来時期がそ

れを物語っているように思われる。

外典に見える三種についてまず見てきたが、同日録に見える内典からも東坡に関連したものを挙げておくと、『樂邦文類』（日字号）や『施食通覽』（呉字号）といった書物がこうした早い段階で日本に渡ってきたことが確認できる。そのうち『樂邦文類』五卷は南宋の宗曉が浄土に関する古今の文を集めたもので、東坡の手になったものとしては、唐の柳宗元が著した「東海若」の後に書きつけた「東海若の跋」（卷二）をはじめ「阿弥陀像を画くの讚」（卷二）や「阿弥陀像を画くの偈」（卷五）、「天竺の宝月大師を弔う」（卷五）といったものが収められ、さらに宗曉が同書に漏れたものを補った『樂邦遺稿』二巻にも「龍舒増広浄土文」から引用した「蘇東坡の前身五祖戒禅师」（卷下）の一文が見られる。また同じく宗曉の『施食通覽』一巻は重要な仏教儀礼の一つ、施餓鬼についての著述を幅広く集めたもので、現在ではこの書でのみ見ることが可能な文を含んでおり、その点でも貴重視されている⁶。東坡の手になるものとしては「施餓鬼食文」「水

陸法像賛一十六首」「水陸を修して枯骨を葬るの疏」などが収められ、加えて東坡の文を引用した「破地獄偈を誦する感驗」が見られるなど、この方面でも東坡の存在の大きさをあらためて知ることができる。

以上、円爾弁円の将来目録を通して東坡受容の一端を探ってきたが、これらに見える内容から当時日本で希求されていた詩文集がどのようなものであるかをある程度推し量ることができるならば、ここに至っても未だに必要とされたものは『白氏文集』をはじめとする唐代のものであって、宋代のものは東坡に限らず欧陽脩や黄庭堅のものも録されていない状況がまだ続いていたことが分かる。宋代文学の本格的受容に意識が及ぶには、今しばらく時間を要したのである。

五

前章では、渡宋僧による将来目録などを通して東坡受容を見てきたが、ここでは平安の末から鎌倉にかけてにわかに勃興した浄土教に関係する書物の数々から、

東坡につながるものを抜き出しておきたい。ただこの分野に東坡の名が直接あがってくるのは後年のことになるため、ここでは前稿第二章の『臨川先生詩』や『筆談』のところでも述べたように、受容という意味を広くとらえ、東坡の名や詩文を直接引用したものばかりでなく、たとえ直接的な記載はなくても明らかにそれらを含んでいる書物の引用まで視野に入れることとした。

周知のように日本における浄土宗は法然房源空（一一三三～一二二二）によって開かれたが、そのさい拠りどころとされたのが五世紀の後半から七世紀にかけて曇鸞、道綽、善導によって確立された中国浄土教の流れの継承であった。したがって法然の著述には、これらの祖師が遺した著作は言うまでもなく、その後、唐代から宋代にかけて著された浄土の教えに基づく文を選びすぐった書物からの引用が数多く見られる。たとえば建久九年（一一九八）に著された『選択本願念佛集』には、宋の王日休が編んだ『龍舒増広浄土文』十二巻からの引用が見られるが、同書には東坡が南遷

にあたって阿弥陀佛一軸を帯同していたというよく知られた逸話「戒禪師の後身東坡」(巻七)の一文や、後に詳述する東坡の書写した『楞伽經』にふれた「楞伽經の説」(巻九)の一文が収められているのである。もとより、『選択集』にはこれらからの直接の引用は見られないが、少なくとも法然の脳裏には、宋代に東坡という参禅に熱心な居士がいたことだけは刻みつけられていたことであろう。なお前章でも少し触れたように、『龍舒増広浄土文』の内容と傾向を同じくする『楽邦文類』五巻が、慶元六年(一一二〇)に宗暁により編まれているが、この書が俊苒によって将来されたのは法然示寂とほぼ同時期であり、法然がこれに目を通すことができた可能性はかなり低いと言わざるを得ない。ただ、『龍舒増広浄土文』と『楽邦文類』の両書はこれより後に浄土教の書物に多く引かれることとなり、後年のことになるが、永享八年(一四三六)に西誉聖聡によって著された『當麻曼陀羅疏』には、それに基づいた東坡への言及が見られる⁷⁾。

いっぽう法然に師事し、後に浄土真宗の開祖となっ

た親鸞(一一七三～一二六二)も、元仁元年(一二二四)から折に触れて書きためたとされる主著『教行信証』に『楽邦文類』を数多く引用しており、その正式の書名である『顕浄土真実教行証文類』も『楽邦文類』を意訳しての命名とされる⁸⁾。ただ親鸞も法然と同じく直接に東坡への言及はなく、管見の及ぶところ、真宗関係の書物に東坡が引かれるのはさらに遅れて元和年間(一一六一五～一一六二二)に撰述せられた甫顔の『本願寺表裏問答』の記述まで待たねばならない⁹⁾。

一般に東坡の本格的な受容というと禅林五山におけるそれがイメージされるのであるが、東坡の詩文には禅のみならず先に引いたような浄土についてのものも散見され、けっして一宗一派に片寄ったものではなかった。したがって、それら浄土に関する作品の引用こそ十五世紀になってからであったが、『龍舒増広浄土文』や『楽邦文類』を通してその作品が読まれていったという点ではけっして禅に遅れていた訳ではなく、それぞれ別の道を歩んでいたと見るべきであろう。

以上、第四、五章では、仏教関係の書物から目につ

六

いたところを列挙してきたが、このほかでは前稿第二章で触れた『夢溪筆談』以外の随筆や詩話の類など、この時期の受容を語るうえで欠かすことのできない資料であろう。なぜならば、こういった類の書物にとつて東坡ほど話題が豊富な人物はほかになく、読み手も本格的な作品から入るより、そうした瑣事を通して人物に親しみを抱くことは十分に考えられるからである。

とりわけ恵洪の『冷齋夜話』、阮閱の『詩話総龜』、胡仔の『茗溪漁隱叢話』といった十二世紀前半から半ばにかけて著されたものは、東坡に関するかなり詳しい記述が見られるところからも、受容を語るうえで避けて通れないものと言えよう。¹⁰しかし遺憾ながらこれらの書物については文献に全く書名が挙がってこず、將來を含めた受容については未だ明らかにされていない面が多い。¹¹こうした随筆や詩話といった類の受容が、五山文学が興る以前の国文学に与えた影響の大きさを考えたとき、これからの研究成果が切に俟たれるのである。

東坡の場合、その受容は文献資料を通してだけとは限らない。これも夥しく遺された書道作品は、その個性溢れる書風などから宋という新しい時代に相応しいものと評され、蔡襄（君謨）や米芾（元章）、黄庭堅（山谷）とともに北宋の四大家の一人に数えられている。

ところが日本ではかつてより王羲之の優美な書風を唯一の軌範として尊び、それは平安時代の末にまで及んでも一向に変わる気配を見せなかった。そうした風潮に抗って宋代の新たな書風を積極的に学び、自らの書風へと反映させたのは、第四章で述べたように栄西と俊苾であった。そうした宋代の書道の紹介者達が最も模範としたのは鋭い筆鋒を持ち、奇峭と称される山谷の書であるが、それに次いでは雄勁な中に渾厚の気を藏した東坡の書ということになろう。では歴大な作品が遺された東坡の書の中で、具体的にどういったものが平安の末から鎌倉の初めにかけて将来されたのであろう。

そうした東坡の書蹟として、日本で最も早くから知られているものとしては、「宸奎閣碑」の宋拓を挙げべきであろう。これは明州、現在の寧波（浙江）に立つ阿育王山広利寺の懷璉えうれんが、仁宗から賜った宸筆の詩を納めるため寺内に宸奎閣を建てたところ、創建から約二十年後の元祐六年（二〇九一）、弟子たちがその由来を長く伝えたいと考え、東坡に撰文、書丹を依頼して立てた碑である。この宋拓は仁治二年（一二四一）、

『普門院經論章疏語錄儒書等目錄』の項でも触れた円爾弁円によって将来され長く東福寺の什物であったが、幕末に個人の所有となり、現在は宮内庁書陵部に所蔵され、国宝に指定されている。かつて中田勇次郎先生はその解説文の中で、「端正でたくましい気象のみなきつた大書」であり、「その大字の楷書をみることできる最上品というべきである」と推奨しておられるが、当時この書を目にした者も、或いはその詩文から受けるもの以上に、その人柄に思いを馳せたことである¹³。もともと「宸奎閣碑」が将来される以前に、すでに東坡の書が伝わっていたであろうことを窺わせる資

料がある。それは前に述べたように俊苻が建暦元年の帰朝の際に持ち帰った法帖や拓本で、伝記に「法帖圖書堂帖等碑文七十六卷」と見えていたものであるが、今となつてはその内容を確かめようもなく、やはり「宸奎閣碑」の宋拓をもって東坡の書蹟の嚆矢とするのが穏当であろう。

東坡の書蹟として、真蹟でもなく拓本でもない極めてユニークな伝わり方をしたのが『楞伽經』四巻である。それは最初金山寺（江蘇）で佛印了元の提案により東坡が筆を執り、それをそのまま版に刻す、いわゆる写刻本として流通し、後に福州の東禪寺等覺院で大藏經を刊行するに際して、同經の底本として使われたのがその金山寺版であった。しかも刻入にあたっては再び写刻の体裁をとつたため、金山寺版が失われた今、この東禪寺版大藏經によつてのみ東坡の書に接することができるようになった¹⁴。これは予てより一部が写真で紹介されていたが、平成二十七年に醍醐寺が所蔵する同經全冊がカラーで影印されたため、四万四千字に

も及ぶ東坡の書を容易に目にすることができるようになったのは、単に仏教や書道の資料としてのみならず、受容史の上からも画期的なことと言わねばならない。¹⁴⁾

またもう一つ意義を付け加えるならば、経典に付された跋文（『東坡集』では「楞伽経の後に書す」の題で収む）は、日本にもたらされた東坡の文として確認しうる最も早いものであるという点であろう。

では、この写刻本『楞伽経』を含む東禅寺版大蔵経の将来状況はどのようなものであったのか。まず最初にこの大蔵経を日本にもたらした人物として、俊乗坊重源（一一二一～一二〇六）の名を挙げることができ。重源は東大寺の再建に尽力したことで知られているが、前後三回にわたって渡宋を果たしたともされており、建久六年（一一九五）に東禅寺版大蔵経を醍醐寺へ施入している。これは現在も国宝として同寺に所蔵されており、前述の影印本はこれを底本としている。これに次いで仁治三年（一二四二）に宣陽門院親子内親王が教王護国寺（東寺）に施入した大蔵経があり、これについては小野玄妙氏の考証により紹定五年

（一二三二）以降に摺印されたものであるとされている。¹⁵⁾このほか幾つかの東禅寺版大蔵経が将来されているが、その時期や現在の残存状況などについては不明な点も多い。

ところでこうした写刻本『楞伽経』を通しての東坡書蹟の受容と言うと、あるいは五千巻を越す大蔵経の中にあつて四巻に過ぎない教典の、それも単に書写した人物にそれほど人々が注目したであろうかという疑問はとうぜん湧くであろう。しかし、同経が『金剛経』とともに禅宗所依の重要な経典の一つであることは言うまでもなく、さらにそれが写刻本として収められている点からも注目されたようで、同経に触れた文献の多さがそれを物語っている。たとえば『楽邦遺稿』巻下に記載する「張文定公の前身僧為りて楞伽を書す」の一文には、東坡が『楞伽経』を書写するそもそのきつかけとなつた張方平と同経との出会いについての有名な逸話が見られ、また前述の「楞伽経の説」にも、東坡が書写した四巻本の『楞伽経』について「達磨発揚し、東坡書する所」と記し、禅の始祖である達磨大師

と東坡を並称し、さらに東坡の書にまで言及している。⁽¹⁶⁾さらに虎関師鍊が「仏論心論後序」(『濟北集』卷八)の中で「東坡居士の楞伽經の跋に云う」と記していることなど、人々から大いに注目を集めたであろうことが察せられるのである。このように十三世紀の半ば頃になると、将来される東坡の書蹟がおいおいと見られるようになり、おそらくそれらは詩文とは違って、より直接的に人々を魅了したことがうかがえる。

七

前章までは、十二世紀半ば以降における書物や書蹟を通しての受容について述べてきたが、この章では少し見方を変え、生前の東坡に出会って言葉をかわした日本人がいたのではないかという説を紹介しておきたい。これに最初に気付いたのは藤善眞澄氏で、成尋^{しやうじん}の渡宋期の記録として知られる『參天台五臺山記』の記述⁽¹⁷⁾などを通して、右のような説を立てられたのである。ただ同書に直接東坡の名が記されている訳ではな

いため、以下にその経緯をかいつまんで記しておきたい。

洛北の古刹大雲寺の僧成尋(一〇一一―一〇八一)は、延久四年(一〇七二)、中国の年号では熙寧五年三月に念願の渡宋を果たし、天台山や五台山などを巡錫している。『參天台五臺山記』はそのうち最初の約十五か月間の記録で、先に帰朝する弟子の頼縁等に託されたものである。まず藤善氏が注目したのは、渡宋して間もなく杭州(浙江)に立ち寄った六月五日の條(同書卷二)に、無事天台山へ巡拝することができるように申請をしたところ、それに対して発給された通行許可証にあたる牒文(公移)をそのまま書き写している箇所である。あるいは原本には牒文が貼り付けられていたのかもしれないが、いずれにせよこれは当時の入宋に際しての手続きを物語る貴重な資料とされている。その牒文の最後に杭州の知事であった沈立をはじめ七名の署名が見て取れるが、その中にある「太常博士直史館通判軍州事 蘇立^{ソウリツ}」と読める官職と署名が当時杭州の通判に任ぜられていた東坡の本名である「蘇軾」

に他ならないとし、それまでそういった事実注目されなかったのは、各自が意匠をこらした押字（花押）に惑わされ、蘇立という人物と思ひ込んだためであるとしている。現在、成尋が書写し頼縁に託した『參天台五臺山記』の原本は伝わらず、最も古いとされる抄本は約百年後に書写された東福寺藏本であり、その他にも十種余りの抄本が伝わっているが、このように転写を繰り返していくうちに読み取りにくい押字などは別字にすり替わってしまうことは十分に考えられるのである。さらに同書を『史籍集覧』（一九〇二年、近藤活版所刊）や『大日本仏教全書』（一九一七年、仏書刊行会刊）に収めるため、活字に起こす際に「蘇立」としてしまつたならば、誰もそれが東坡を指すとは思われないであろうといふのである。⁽¹⁸⁾

ただこの時点では牒文に署名はもらえたものの、東坡と直接会つて言葉を交わしたとする記録はなく、それが果たされたのはどうやら翌年のことのようにである。成尋は念願の天台山参拝を終えたのち杭州を通つて開封（汴京）を訪れ、翌熙寧六年の五月に三たび杭州に

立ち寄っているが、その二十二日の記述に次のように見えている。

廿二日甲子、天晴、辰一点、參通判学士、出船申文与判。劉殿直申文也。次參通判郎中許。二人共有点茶湯。（卷八）

成尋がこの日の朝に面会した「通判学士」こそ東坡その人に外ならず、一行はそこで出航許可の印をもらい、茶の接待まで受けたことが読み取れるというのが藤善氏の論旨の概要である。

右の内容は受容ということ抜きにしても非常に興味深く、また東坡の杭州通判期における日常業務の一端が垣間見える点でも心惹かれるものがある。ただ言うまでもなく、成尋は仏教の聖地巡錫に渡宋した折、偶然東坡に出会つたのであり、その名を『參天台五臺山記』に記していないことから推して、さほど記憶に残らなかったと想像される。おそらく巡錫の手続きをしてくれた官僚の一人という以上のものではなかつたであろう。それは同行の者達も同様であつたらうし、それは当時の日本における東坡の知名度が無いに等し

いものであったことをそのまま反映していると見て間違いない。

ところで、成尋が東坡と話を交わしたとされる熙寧六年、高麗からの使者がやはり杭州に立ち寄っている。それは八月に高麗を出発した金良鑑の一行で、十月の末から十一月の初め頃に杭州に立ち寄り、東坡が設けた宴会に加わったとされている。この使節団は熙寧七年年に帰国したが、その翌年に生まれた子に金富軾と名付けた者がおり、さらに四年後に生まれた弟に金富轍と名付けている。これが蘇軾、蘇轍兄弟に倣ったものであることは言うまでもなく、高麗における東坡受容が生前の、それも三十歳台後半の頃からすでに始まっていたことを象徴する事象としてよく知られている。こうした受容の速さをもたらしたものととして、これに先立って四十年ぶりに宋との公式の往来が再開したことや、科挙制度の確立によって読書人が増え、優秀な成績で科挙に合格した東坡兄弟に対する憧憬が高まりを見せたことを要因に挙げることができよう。一方そ

ういった高麗に対し、日本では限られた宋船からの情報しか入手する術がなく、しかも受容層である貴族も漸く没落期にあたっていたことが極端な遅速を招いたとも言えよう。しかし、そうした表向きの事情ばかりでなく、そこにはもともと本質的な差異、受容すべき文化をより慎重に吟味し、自国の実情に合うか否かを判断しつつ摂取を行ったがために、自ずと時間を費やさざるをえなかった日本の事情も同時に浮かび上がってくるように思われる。

八

以上、『台記』から約百年間にわたる東坡受容をひとわたり見てきたが、この平安末から鎌倉初めという漢籍将来にとつては困難な時勢にあつて、それでも東坡の名と作品は徐々に日本文化に浸透し、宋代文化への接近とともに、その存在の重さも理解されていったことであろう。ではそうした考証を承けて、いま一度、道元の『正法眼蔵』の書きぶりに注目すると、その東

坡を日本に紹介したいという一種の啓蒙的口吻は、すでに無用であったのかと言うと、決してそうは思われない。もちろんこの頃になると、東坡の名などほとんど知る人も無いという段階は過ぎ去ってはいたが、あくまでもそれはごく限られた階層の人々の間のことで、個々に将来された作品がある程度読み込んだ上で、彼こそ唐に代わる新しい宋代文化の担い手であることを理解し、その宣言とも言うべきものを名著で明らかにしたことは、単に禅のみならず、以後の日本文化への東坡受容に一つの指針たりえたという意味で、その役割には大きなものがあつたと評することができよう。

江戸時代中期の漢学者江村北海は『日本詩史』の中で、彼我の地が万里隔たり、その間に大海が横たわっているため、歴代の詩は約二百年後れて日本で盛んになると述べている。⁽²⁰⁾たとえば古詩から近体詩への移行がそうであり、その後も初唐あるいは白居易の詩など皆それだけの時を要したと言っているのである。これは大きな文学の潮流を見据えての発言であるが、それは東坡の受容にもある程度通じるものがあるのではなからう

か。東坡が生まれて二百四年後に「溪声山色」の條が講ぜられたのは偶然にしても、南宋の宣和五年（一一二六）に元祐党人の著作に対する禁が解かれ、東坡の詩文が人口に膾炙して約二百年後、雪村友梅や虎関師鍊によって五山文学を隆盛に導く土台が築かれたことを思い起こすならば、『日本詩史』が言うところもあながち牽強附会と片付けられないのではないか。ただそれは二百年という歳月が過ぎ去れば自ずと日本でも流行するという意味ではなく、本稿でも見てきたように、多くの人々による試行錯誤が不断に行われた結果であることは言うまでもない。

注

(1) 俊仍の書道を中心とした事績については、神田喜一郎先生の「日本書道史上における俊仍律師」(『神田喜一郎全集 第二卷』所収)に詳しく説かれている。なお同文には渡宋中における俊仍と楼鑰(一一三七―一二一三)との深い交情について考証されているが、その楼鑰の『攻媿集』には東坡に関する記述が実に多く見られるところから、こうした交遊を通して東坡への理解を深めたことも考えられよう。

(2) 『普門院経論章疏語録備書等目録』は『昭和法宝総目録』卷

三(『大正新脩大藏經』別卷所収)などに収められている。

- (3) これら『普門院經論章疏語録儒書等目錄』に見える東坡の詞集については、神田喜一郎先生の『日本における中国文学Ⅰ—日本填詞史話上—』(一九六五年、二玄社刊。後に『神田喜一郎全集 第六卷』所収)に収める「五山文学と填詞(三)」に詳しく説かれている。

- (4) 傳幹の注釈書については、排印本『傳幹注坡詞』(一九九三年、巴蜀書社刊)が刊行されている。なお傳幹およびその注釈書については、同書に付された劉尚榮氏の「注坡詞考辨」及び『蘇軾詞集版本綜述』に詳しい(後者の初出は一九八六年に刊行された『詞學』第四輯である)。「注坡詞」の刊本は現存したものがなく、現在は写本でのみ伝わっている。なお撰者の名は「榦」が本字であり意味的にも正しいが、本稿では教育漢字に従っておく。因みに注(3)に引いた「五山文学と填詞(三)」では、すべて本字が使われている。

- (5) 劉尚榮氏は「蘇軾詞集版本綜述」の中で、「東坡先生長短句」は「注坡詞」と共に東坡詞集の最も重要なテキストであるという趙万里氏の評を載せている。また同書の刊行年については、汲古閣影宋鈔本『東坡詞拾遺』に付された曾慥の跋語に「紹興辛未孟冬、至遊居士曾慥題」と見えることに基づいている。

- (6) 『施食通覽』には開禧元年(一二〇五)の跋文が付されているので、その頃に刊行されたのであろう。なお筆者は拙稿『蘇東坡と水陸会』(『西山学苑研究紀要』第十二号)の中でも、同書の持つ重要性について言及した。

(7) 『當麻曼陀羅疏』卷二十六(『浄土宗全書』十三所収)に、「戒

禪師後身東坡、五祖戒禪師乃東坡前身、応驗非一、以前世修行故今生聰明過人、以五毒氣習未除故今生多緣詩語、意外受竄謫、此亦此大誤也、若前世為僧、參禪兼修西方、則必徑生浄土、成就大福大慧、何至此世界、多受苦惱哉、聞說東坡南行、唯帶阿彌陀仏一軸、人間其故、答曰、此軾生西方公據也、若果如此則東坡至此方為得計亦以宿殖善根明達過人、方悟此理故也」と記し、「已上浄土文」と見えている。

(8) 『教行信証』については元仁元年(一二二四)、親鸞五十二歳の時に成立したとする見方もある。なお同書には『樂邦文類』が六回引用されているが、これについては春日礼智氏の『樂邦文類と宋詩紀事』(『大谷学報』二十三―三十五)や安藤章仁氏の「親鸞における『樂邦文類』の受容とその意義」(『高田学報』第百輯)に詳しい。

(9) 『本願寺表裏問答』巻上に、「数寄ハ 本来古人モ モテアソフ トコロ 当世ノ人サカシニ是ヲコヒ子カウ誠ニ芳甘酌テタツ トキケンケイ フノミコメナリ カルカヘ 故ニ盧全カ七椀ノ茶歌陸羽カ三篇ノ茶経 其ホカ東坡先生カ人間第一ノ水トイフモ 定テ是ナルヘシ 誰カ是を一涯ニステン」と見えている。

(10) これらが宋代に刊行された時期は、おおよそ次の如くである。
『冷齋夜話』……恵洪(一〇七―一一二八)撰。北宋末に刊行。日本では南北朝時代に刊行。

『詩話総龜』……阮閱撰。一二三三年に刊行。
『茗溪漁隱叢話』……胡仔撰。前集は一二四八年、後集は一二六七年に刊行。

(11) 小野泰史氏は「十二世紀に至る詩歌論の展開」(『中世漢文学の形象』(二〇一一年、勉誠出版刊)所収)の中で、十二世紀の初めに著された大江匡房の『江談抄』などに明らかに宋代詩話から得たとおぼしき記載があるものの、何故かそれについては一切明記されていないと記し、それが検証できるのは虎関師鍊の『済北集』や義堂周信の『空華日用工夫略集』が嚆矢であるとされる。

(12) 中田勇次郎先生による「宸奎閣碑」の解説は「請求美術(原色日本の美術29)」(一九七一年、小学館刊)から引用した。

(13) 東坡が「楞伽經」を書写するに至った経緯とその後の受容については、拙稿「蘇東坡書写『楞伽經』攷」(中田勇次郎先生頌寿記念論集『東洋藝林論叢』一九八五年、平凡社刊)および「蘇東坡と写經(二)——『円覚經』『楞嚴經』『楞伽經』——」(『西山学報』五〇)で論じた。

(14) 東坡の写刻本『楞伽經』の影印は『醍醐寺藏宋版一切経目録別冊影印篇』(二〇一五年、汲古書院刊)に収められている。

(15) 東寺が所蔵する大藏經については小野玄妙氏の「東寺経蔵の北宋本一切経に就いて下」(『仏典研究』一一八)参照。

また東禅寺版大藏經をはじめ多種にわたる大藏經の将来と所蔵については、木宮泰彦氏の「入宋僧の宋版大藏經将来とその影響」(『日華文化交流史』(一九五五年、富山房刊)所収)に詳しく説かれている。

(16) 『大正新脩大藏經』所収の『龍舒増広浄土文』では「達磨発揚東彼所書」に作るが、これでは意味が通らない。ここでは「浄土宗全書」所収本が「東坡」に作るに従う。

(17) 成尋が東坡と面晤の機会をもったことについては、次に挙げる藤善眞澄氏の著書や論考で詳しく述べられている。

「成尋をめぐる宋人——『参天台五臺山記劄記』二の一」(『関西大学東西学術研究所紀要』第二十六号)。

「入唐僧異聞」(『中国史逍遙』(二〇〇五年、藤善眞澄先生古稀記念会刊)所収)。

『参天台五臺山記の研究』(関西大学東西学術研究所研究叢刊二十六)。(二〇〇六年、関西大学出版部刊)。

(18) 王麗萍氏が校点を施した『新校参天台五臺山記』(二〇〇九年、上海古籍出版社刊)も、この「立」に似た字に対し「似為花押」として蘇軾を指すと結論づけている(巻二、校勘〔三〇〕参照)。ただ同書には巻八の「通判学士」が誰を指すのかについての記述は全くない。

(19) 東坡が高麗でいかに受容されたかについては、鄭墀謨氏の「高麗朝における蘇東坡受容の様相——使臣往来と蘇東坡詩文集の伝来を中心に——」(『中国文学報』第七十四冊)に詳しく説かれている。

そのほか李丙濤氏の「高麗三蘇考」(『東洋学報』十六卷四号、一九二七年)など東坡と高麗の関わりについて考察した論考が何篇もあるが、いずれも未見。

(20) 江村北海『日本詩史』巻四に次のように記している。

我邦与漢土、相距万里、劃以大海。是以氣運每衰于彼、而後盛于此者、亦勢所不免。其後于彼、大抵二百年。胡知其然。懷風凌雲二集所収五言四韻、世以爲律詩非也。其詩对偶雖備、声律未諧。是古詩漸變爲近体、齊梁陳隋漸多其作。我邦承其

氣運者。稽其年代、文武天皇大宝元年、為唐中宗嗣聖十四年。上距梁武帝天監元年、凡二百年。弘仁天長髣髴初唐、天曆志和崇尚元白。並龜勉乎百年（原刊本は百年に作るも或は二百年の誤りか）之後。五山詩学之盛、当明中世。在彼則李何王李、唱復古於前後、在此則南宋北元、專傳播於一時。其距宋元之際、亦二百年。

なお同書については『日本詩史 五山堂詩話（新 日本古典文学大系65）』（一九九一年、岩波書店刊）に、大谷雅夫氏による書き下しと注釈が載せられている。

補注

前稿の注（12）で東洋文庫所蔵の『歴代地理指掌図』について触れたが、そのさい影印本である『宋本歴代地理指掌図』が一九八九年に上海古籍出版社から出版されていることを記しておかなかったのでここで補っておきたい。なお同書には譚其驥氏による「序言」と曹婉如氏による「前言」が付され、その概要を知ることができる。